

転がる石

津木林 洋

彼が今月限りで会社を辞めたいと申し出た時、課長は意味が分からないという顔をした。

「どうして。何か不満でもあるの」

「いや、別に……」

「だったら、何なの」

「特に理由はありません。ただ自分は飽き性なもので……」

彼は三十二歳になる今まで、十回ほど転職をしている。主に編集の仕事をしてきて、現在のスマホのマニュアル作りの仕事は二年になる。

「何言ってるの。仕事なんて誰でも飽き飽きしてるんだよ。それでもやるのが仕事じゃないか。すべてはルーチンワークだよ、ルーチンワーク」

彼はうんざりした。今まで何度同じようなことを聞かされてきたことか。

「辞めてどうすんの。二十代ならまだいいけど、その年になったら簡単には次の仕事なんか見つからないよ。いい加減腰を落ち着けたらどうなの」

ケツから腐っている人間にはそのことさえ分からないのさ、と彼は胸の裡で毒づいた。

「分かった。何かやりたいことがあるんだろう。夢を追うのはこれが最後なんて思ってるんじゃないの」

やりたいこと？ そんなものない。

「小説でも書こうと思ってるんじゃないの。編集している人間で結構いるんだよ。そういうヤツが」

なるほど。

「実は、小説を書こうと思ってまして……」
課長の表情が緩んだ。

「やっぱりな。でも小説じゃあ飯が食えないよ」

失業保険が切れるまでの間、一丁小説でも書いてやろうかと彼は思った。飽きれば止めればいいし。そう思うと彼は今すぐにでも会社を辞めたくなった。